吉田風物詞帖

特257
179

始

特257
179

吉田風物詞帖

目錄

一、舊棧橋
二、國安川口
三、吉田病院
四、横堀
五、犬日山
六、鶴間川
七、陶成學舍
八、海藏寺
九、大信寺
一〇、長福寺
一一、女學校
一二、幼稚園
一三、石場
一四、太皷山
一五、樫木原
一六、柳橋
一七、愛宕山
一八、濱通
一九、サイレン山
二〇、闘牛場
二一、福ケ森
二二、宗五郎神社
二三、八ツ橋
二四、黑門
二五、中番所
二六、新田
二七、墓地
二八、一乘寺
二九、大乘寺
三〇、左海別館
三一、三輪橋
三二、長榮橋
三三、御殿前
三四、大樂寺
三五、住吉神社
三六、聖人寺橋
三七、馬ノ背
三八、蜜柑山
三九、立間街道
四〇、君ケ浦
四一、石神神社
四二、宗昌寺
四三、八幡神社
四四、潮田
四五、安藤神社
四六、鶴間橋
四七、八賢神社
四八、小學校
四九、中學校
五〇、安藤廟
五一、明淵寺
五二、二十九銀行
五三、聖人山
五四、櫻橋
五五、法華津峠
五六、新棧橋
表紙　安藤神社紋章模樣
見返　祭禮御船ト鹿之子
扉（故芝英吉氏作）祭禮牛鬼

舊棧橋

遠見山から陽が新らしく、
だん〳〵畠に
すべつてきた
一段一段と、

橋桁の霜の
一枚一枚が
かわいてき。
ピーヤをとりまく
魚の一匹一匹が
慈悲光禮讃。

さて　海は
いつの間にか
空の色に
ひろがつてしまつた。

國安川口

春日永ののんどの渦きに
　潮は干て
干潟に船はゆるく圓座し
　貸ボートは
　塗られた片側を陽にして
貝の夢を吐き
　橋は伸びて
欄干は　虹を描けば、
　燕と　俥は翔り、
橋脚は深く春泥へ、
鳴の脚々にならび
貝々と潮干狩の人は點じ
蟹々と童は横行し。
　エトランゼは
海を歩いてゆく
　キリストのよろこびに、
干潟を
　潮の香の陽炎の中にゆく。

吉田病院

石菖の色の洋館は
　青い病氣をゆるやかに抱いて
窓硝子の眼は
　メス、顯微鏡のかがやかさを
　おさめて光つてゐる。
東風しては梅とびとびに
　苦腦の黒いカーランは明けて
　綿球の白さに梅は開いて
　　藥局の匂ひと交響樂。
そして白いナイチンゲールは
呻吟を寢臺車に乘せて
玉と車を轉しては裏の小藪へ。
そしては
不老永春の蘇鐵の株は又筍、
そしては
動物小屋の山羊が
九さくをよろこんで
梅の長壽の苦ふるはするなり。

横堀

白く乾いた櫻橋の上を
春の風と自動車の旗がゆきすぎた、
　それにクロッスして
水温みては白い家鴨を流して
　春への十字路、
警鐘塔は
　白くゴオの手をあげて交通巡査。
橋の球燈は
　あわて床屋の蟹のあわぶく、
川原にほされた傘は
　春のパラソルへの未製品。
やがて
　立春第一日、
この河原に黒い倭人が集ひ來て、
　春の水を
五彩にふきあげて五彩の噴水を
　ポンプの煙火する。

犬日山

石神さんの蔭道を
蛇樹のステッキと出れば。
　まぶしくも
　こゝの山ふところは
春日を抱いて春の嬰兒
　麥寸のシーツに
　まろく包まれた
　みどりごは
棕櫚の木の彌十郎兵衞の
風光るに
白菜の山畠の背の
一ころがりにも微笑。
そして日だまりに
　隱れごつこの少年等は
　道化て
　ポンポンと
　空氣銃を晝の月へあげて
山畠道の鼻唇溝を
更に深くして哄笑。

鶴間川

權現さまの松は
　春の觸手
高砂の熊手のやふに
　枝を伸べれば。
春の潮は
　橋の眼鏡をのぞいて
ひた〳〵と
　川の洲へ
　島臺を描けば。
青藻舟　白魚舟は
　甲羅をほして
亀のやふに居て。
　尉と姥好在。

陶成學舍

管公の墨色の校舍は寺小屋。
　そしてまさに
吉田明治文化史の
　草紙であると物語る。
そして白墨の白色に
　校舍は黒板。
そしてまさに
　吉田昭和の文化史への
　積木であると物語る。
そして白墨の粉の點梅はピアノ、
そして松は千代に律動體操、
そして雪ダルマは石となり居て、
　岩ともなりて
　苔むすまで。

海藏寺

此處の夜櫻の雪洞は
　常夜燈の一灯一樹である。
そして　しめやかの
　春雨のゆきづりは
　　會者定離。
散り初めた花片の一片二片は
　　石段に螺鈿。
夜櫻見物の人々は
　遊子只一人である　か。
否　初蛙の數々が居る、
　しかも櫻の老幹の洞に
　　慰ふて居るではないか。
そして本堂にこもつた
和讃の聲々が
しめやかの
此處の夜櫻の頌である。

大信寺

朝月は
　白木蘭の中に消えて、
鴉は
　尾根の麥畑に消えた。
そして
御堂の中に
　一燈灯れば、
虻は
朝の勤經に
　枝垂櫻にこもり
　　木瓜にこもる。
そして
朝の陽すぢが
道順さんの擬寶珠をすべれば、
白木蘭の一片はかけて
　六地藏さまの
　　おつむをすべる。

長福寺

丸井座の
あさぎ幕色の
　どぶ　おもてに
　　春雨の脚は　銀糸。
袖の柳の書割は
　泥繪具の緑青をふいて、
くろ子の頭巾の燕は
　　低く　ひそんで、
墓石の初蛙は
　　鳴り物、
傘は表の藝題の
　　勘亭流の俠客春雨傘、
觀客のお地藏さんは
　　ハンケチに雫してござる。

女學校

バスケットボールの
スタンドは
　コバルトに塗られて、
春の日の頂上が
　リングの中に入れば。
櫻ん坊のまろさの
　ボンネットの女學生は
葉櫻を縫ふた
　陽ざしの陰影に
スカートのひだの
　規矩に
葉櫻の
　すがすがしさの中から
　透いて生れてくる
風である。

幼稚園

お門は
おてんとふさまと　開いた。
　朝の風が
藤棚の奥から出て
　ポプラの葉ごとに
葉笛を吹けば、
　光の子等は集つて
蜂
　藤の房をめぐつて
　メイポール。
そして
　おてんとふさんが
滑べり臺をすべれば
　藤の房の影は伸び
　伸蔓には夕雀、
お門は
　垣の紅バラの蕾に閉ぢた。

石場

さま〴〵の
　緑がはちきつて
　石場山から
　切り出された
　石ころと、
竹青く流しある
　石場川に
　ころげこめば。
水の輪の
　日傘は
　くる〳〵と
飛び石を
　わたつてゆく。
誰れかは
　ゴミ燒場の
　紫煙をくゆらして、
犬日山の
　圓さを考へてる。

太鼓山

太鼓のやふな
太陽は麥の香がすれば、
太鼓の胴のやふな丘の
麥は太陽の香がして
　ふんぷん。

そして
太鼓のバチのやふな腕は
　蜥蜴のすばやさに
麥を刈り、
毬を土橋の上に
　あふりあぐれば、
麥の殼は
　續々と
青蘆の間を流れてゆく、
　あゝ
太鼓の音を
　忘れる　せわしさだ。

樫木原

ながせの
雨色をすふた
　切石は
四葩の花色に
開いて居て、
ながせの
雨音をうけた
　今年竹は
川瀨の水音に
閉ぢてゆく。

雨の草に
かゆい脚は、
石壘に
散りしいた
　榊の花と
はりついてしまつた。

註●ながせ(方言)—梅雨

柳橋

夕潮
一の橋に
ふくれくれば、
白き家鴨は川をあがり。
夕風
二の橋に
こえくれば、
白き馬は河原草をあがり。
夕闇
三の橋に
せまりくれば、
白き團扇は橋渡りてゆく。
涼しさに橋三つ渡りけり
とな。

愛宕山

山頂の松を
影繪のやふにして
月の出の
空は明るみ
吉田灣の
鱗雲の波に
明月は出で
さん〳〵と
光茫を
月の暈に
下界へ落下傘。
そして
月に面した
顔々は
石梯の
一段 一段 と
天心に昇る よ。

濱通

今年は
　早くに來た
淡路國のでこ芝居の
顏見世の俥は過ぎた。
　そのあと

石橋を　白く
川面を　さか波
　たゝせない程に
光つてすぎた
ものがあつた。
材木の一たまり、
空の蒸氣釜、
鐵鎖にかき船を
足かせにした松の樹、
そして　私が
　それを觀た。

註●でこ芝居(方言)—文樂やふ人形芝居

サイレン山

ひとゝき
　鵙のたけた
　　あと。

瓶のやふに
　はりきつた
　澄みきつた
あをぞらの
　かなめの一點から
ひろがつて
　ゆくもの、
よろこびは
にこやかな
　太陽の面である。

闘牛場

箒草のやふに
枯れた
柵の杭杭は
立ちならんで、
穂草は
さん〳〵と昇る
虫の音に
ゆれて居る。
土俵場の
闘爭の跡は
秋の鏡のやふに
水を溜めて。
石たゝきの尾が
しきりに
勝ち牛を
はやしてゐる。

福ケ森

舊舊街道の松並木は
櫨の並木、
廣重の富士は
蛤山か野島となん、
追想に居れば。
逆光の海色に
櫨紅葉の朱は泌み、
逆光の空色に
はゝなを廻つた
ポンポン船は響き、
黒く點に
櫨の實を採る人が
鳥のやふに見える。

宗五郎神社

萬古の波音の巖から
扶桑社の注連のそよぎと
松の　鶴の容に　あくれば。
大日山の峰への
日新しく、
鶴間浦の波
映えて新し。
其處に
木の香新しの校舍點在し、
其處に苔の香の海邊の巖。
そして
私は亀のやふに
その中に居た。

註●海邊の巖―その年の勅題

八ツ橋

田の水は
空のやふに澄んで、
石場山こもる陽氣な喇叭卒
鴉が喨喨と吹奏、
この田圃の練兵場は觀兵式。
藁束束の騎兵、
刈株株の歩兵、
藁架架の分列式、
山畑畑の橙橙の頭は拜觀人。
その中央を
駕のやふに
しゆく〳〵と
川が　御通り。

黒門

弦を鳴らす
空は目出度き舊正月晴。
的の白と黒の鮮さに
黒門の
ありし日の勇士の
箙の梅。
並べ乾かしある雨傘と
セメン樽との間を
見事に縫ふて
矢は　スピード時代、
初春のユウモアは
　滑つてゆく。
げに光陰は馬の如し、
　呵。

中番所

道が乾いて
　白い　ほこり　が
　立つて
梅も乾いて
　白い　かほり　を
　立てて
天神さまの
　黄銅の臥牛も
　立たなむ　日。
つきあいの
　黒く
　たくましい牛が
橋のたもとから
ぬふて出やふ。

新田

裏山では
　鶯は
　野梅を
　　蹴散らかして鳴いてる。
それが
　この浦に
　こぼれこんで
　　白魚になつたんだ。
そんな事を
　ほされた白魚網を
　すぎた
　　そよ風のやふに
　　想ひして
網をつくらふ人等の
　まどゐにつらなつてた。

墓地

朝々のぬく雨に
　墓地の苔は
　　ふくらんで緑
春の絨です。
　踏み登つてゆけば
犬日山の山頂は
　だん〳〵伸んで
春のソフト帽。
椿は
　春のボンネットの
　造花のやふに眞紅。
築土の塀は
　春の詩集のやふに
　　重つて　白。
山鶯の
　黄ろい聲が
　どこともからして
　　一ぷくしやふ。

一乘寺

蜜蜂の翅音の
　花菜坂を
ブランコの音する方へ
　のぼれば、
其處には
　童の唄に
櫻大樹は
　ゆれ咲き滿ちて
　纓絡。
苔の根元には
　精舍の碑　嚴とあり、
鬼子母神の縁に
　腰すれば
犬日山は
　木魚の肩の丸さに居て、
本堂には
　彼岸會の讀經。

大乘寺

新しい縁
鮮かの縁
爽かな縁に
　うづんだ此の庭に、
若芝と
さゝにごりの池を
　わづかにして
その中にちりばめられて、
庭石庭石の起伏に
　鮮かな薄紅の
　躑躅の花花の高低が點々。
そして
　それ等の蕊のやふに
河骨の一點金なると、
老鶯の一聲である。

左海別館

紫陽花の
　毛穂を重くした
　ながせは
今し
　岩根の青蔦を
　攀ぢて
犬日山の頂上に
　晴れあがり、
ひよ　の二番仔の
　鳴き聲がする。
そして
　赤べんちよと一緒に
　山麓を
　私は散策して居る。
註・赤べんちよ(方言)―赤色の蟹

三輪橋

法華津峠の頂上の
　雲の峰は　崩れて
石場山と犬日山に
　響いて
石橋と土橋との角度に
　屈折して
橋石の固さに
　跡がくだけて
老松の樹幹へ
　しぶき　を吹きつけた。
やがて
　北齋の線が
頑とした古邸の黒壁へ
　腰瓦を模様して
遠見山へ登つた。

長榮橋

唯波ノ鼻からの
潮風は
犬日山の茂みを
そよがせて
　月明の蜩の聲を生みだし。
唯波ノ鼻からの
夕潮は
住吉燈籠の灯を
ゆらめかせて
月明へ舟虫を追ひだし。
唯波ノ鼻からの
月色は
長榮橋の橋架を
削り立てゝ
月明に鰡を飛ばせてる。

御殿前

烈日をかつちり
老松のたくましき
腕々はうけて
　蟬の聲を
　湧かせて居る。
灼土をぢつと
老松のりゆう〳〵たる
太い根はおさえて
　瀨音を
　湧かせて居る。
旱り道を
樹下の床几に
たどり着いた
　蟻のやふな人々は
石城山上に
入道雲を吐いてる。

大樂寺

本堂を廻れば
これは
默して眩しき
風景である。

日が
爛々と降つて居て
百日紅は
今日も開いた
紅を添えて、

谷間を明るくして
芭蕉の葉を羽ばたかせ、
庭石に斑して
佇人を亭に登らせ、
池へ流れ込んで
緋鯉を音させてしまつた。

住吉神社

舟虫は
ひときはさゞくなつて
髭をさゆつて
初潮を招いてる。

雛頭のやふに立つた人は
黍の葉をさゆつて
對岸の
住吉燈籠の石垣になく
蚯蚓を聞いてる。

その間に
初潮は
老松のうねりのやふに
來て
帆柱をさゆつて
月の出を招いてる。

聖人寺橋

朱の點描が、
河原に起伏してる
葎々の
此處彼處に
ともつて居る。
晝の虫の斷奏が、
河原に起伏してる
葎々の
此處彼處に
聞かれて居る。
とある曼珠沙華の
朱から生れた
黒い蝶は
白い石橋を
夢のやふに跳んで、
竹やぶのきれまを
越えて去んだ。
それは私の魂だつた
やふな氣がする。

馬ノ背

一雨は
尾根に續く松にたまつて
綠である、
そして
初紅葉は紅である。
巷の聲、　鳥の聲。
夕陽は
背に續く赤土にたまつて
朱である、
そして
初紅葉は黄である。
海の聲、　虫の聲。
一風
あるともなしに松籟、
馬ノ背の陰から
山遊びの少年が
茸のやふに生れた。

蜜柑山

これは
　眩ぶしい風景である。
淡黄色　橙紅色
あらゆる黄色の鋲々が
　緑の葉のマッスに
あまりに澤山
　うちこまれた風景である。
そして
　光る海からの風が
ゆさ〳〵と
　その眩ぶしさを
私の眼に鏡してる、
　反射させてる。
陽にぬくとまつた
　酸味を戀する。

立間街道

街道の左側は
　野菊にせゝらぐ流れ、
そして
　並樹の櫨の朱の枝には
危病除けの草鞋がゆれてる。
街道の右側は
　葉雞頭に鳴く雞の家々、
そして
　廣がりの田の黄の穂には
豊年の鳴子がゆれてる。
そして
　その街道の上には
眩しい色の蜜柑を積んだ
　車　車　が
　わだち　ほがらかに。

君ケ浦

日本畫の一刷毛の海に
黒い鳥影が沖の島へ、
白いポンポン船が陸へ、
棧橋の上には蜜柑箱の山。
そしてその日あたりの上に
かけられた軸は
錦秋之圖。
日本畫の隅筆一筆の山に、
桑畑の黄色の陽と
杉山の陰。
櫨紅葉の朱色の縦と
蜜柑畠の横。
そして澄空へ
一沫の浮雲の一文字である。

石神神社

竹の葉づれが聞ゆる。
麓の小學校から
放課後のピアノのゆるやかさが
のぼつて來て、
竹の葉洩れ日の
とがつた斑が
石神様の
積んだ小石の上にをどる。
日なたの山側の
蜜柑をつむ鋏音が
越えて來て
櫨の實の房々が
切通しの空へ
黒くゆるゝ
竹の葉づれが聞ゆる。

宗昌寺

冬晴れの
山の方の空へ
石の門柱が聳えて居る、
冬晴れの
海の方の空へ
常緑の針葉が尖つて居る。
そこへ　なだらかに
石垣の曲線が
左右から集り、
觀音堂と本堂との
破風の線が融合して居る。
私は
此處に日向ぼつこして居る
大蘇鐵の幹の
ゆるやかさに融合して、
本堂の新しい木の嗅の
香の中に居る。

八幡神社

社頭の篝火のやふに
新年の心は燃えて
鳥居の注連のそよぎに
新春の心をそよがせて
石梯をのぼる。
拜殿の太鼓は
おほらかに
森のくま〳〵に谺して
反れば、
松の秀峰から
神苑こめての
天地の白は
ほの〳〵と明けて。
白き木像の木馬は
いなゝき、
新らしき陽の一すぢへ
いらかの鳩は
翔けりのぼりて
梢の雪を撒く。

潮田

雪に白い
周圍の中に
黑く光つて潮田がある。
眼をとゞむれば
松の影は
かすれ〳〵にうつゝて
横たひ。
脚の長い黑い
小さい鳥が　三　五
はなれ〳〵に歩いてる。
寒潮の一條は
枯葦の
根の間根の間の雪に
こゞまつて
チロチロとかすかに
笛を吹いて居る。

安藤神社

東風吹いて
屋根ぐしの
鯱の尾鰭は
ピンとした。
東風吹いて
屋根の千木のあたりの
しつくひの白に
紅梅が點々と開いた。
東風吹いて
石燈籠の窓の
滿月の上に
綠のヒゲ苔がそよいだ。
そして
ただやふ梅の香に
蔀はあげられ、
裏山の紫の中から
鶯の聲をと
耳をそばだてる。

鶴間橋

白梅を
うつした流れは
　ゆるやかに
　枯葦の根をまはり、
笑ひかけた
　犬日山の片頬を
　くすさす
　　手鏡してる。
午後の陽ざしは
　枯葦の一本一本を
　梳づり、
春へのカーテンに
　鳥影のやふに
　新橋と土橋を
　　人影が渡る。

八賢神社

春への雨が煙つて居る、
背の山はぼふ〳〵として
居る。
　夏柑は
　　不時の雪にこたへて
　　るい〳〵と谷筋へ
　　ころげて居る、
輝けるしるしをおもひ
そのかみの
烈士の魂をおもふて
　　慄然と
雨粒したゝりて
光り濃き
　　葉かげに
　りんと開いた白椿の丘へ
走せ参じた。

小學校

窓の雪の白さの土塀にかこまれた
おんみ等の城は、見事だ。
その中にならぶ〳〵
せんだんの樹の實の粒々を
澄んだ空に見上げると
螢の赤い頭の可愛さがあり。
おんみ等の
晴れやかな顔々頭々、
東の枝は修身を聞いてる顔
西の枝は算術にかゝへこんだ頭
南の枝は唱歌の口の中の顔
北の枝は顔の習字。
おぢさんの心は風船になつた
（否實際もふはつとした）
笑っちゃいけないよ
たつた片足
靴の踵だけ
溝へ落ちたよ。

中學校

記念樹をまもる木柵は
肱のぬけた小倉服の
たくましき
おんみ等の腕をおもひ。
つゞく
卒業記念樹のもとに
萠え出た若草の色には
おんみ等の新鮮な頭腦をおもひ。
紫匂ふ
グラウンドのはれやかさの
校旗をかこむ
房々たらん。
「萬年筆のインクが無く
なつた」
きつとおれの色のあせた
制帽を
氣にして塗つた
報ひだよ。

安藤廟

山隱の沈重
杉の鋒々にかこまれて
　青苔の蓆の上に
どつかりと
　その廟はあり、
水色ばかしの白い幕には
鮮かに御紋章。
花立の椿の紅
奉納の黑髮の綠は活きて
千代の記念　安藤忠死錄を
　瞼する。
どこからともなき
手向の香の薫は
この靜謐境へ
大銀杏の金砂子を撒く。

註●安藤忠死錄—甲斐順宣氏著明治三十九年刊

明淵寺

鐘樓は
　綠銹に沈默して
背の山には
　竹の節々が
　風に鳴つて
紅椿白椿が
　苔の上を轉げた。
池の小波は
　散るものゝ水葬。
しだれ櫻の散る枝々と
漱水の芽ぶきの枝々とは
卍を　しつかときり
結んだ。
そして
　雲間出た陽すぢ
　ほがらかの鶯の聲。

二十九銀行

（此の建築物の前ではガソリンの嗅ひが嗅ぎたい）

鐵の扉はピッタリ閉された。
金庫と石造と摩天との總量に
土にめりこんでる
この銀行の　默示。
「鐵の爪」はしきりに
誘惑を感ずるのでした。
石材の鐵鎖の足架は重いが
やりましたッ。
金貨のカーブの屋頂まで
「アッしまつた」――轉落。
ヘッドライトに目をやられたのです。
（以上ではあまり可愛相です）
運のよい奴は
ガソリンの嗅ひに吾にかえれば
寶石箱をぶちまけた
春の星空――。

聖人山

しでの花は白く
山の背の土は紫。
墓石の圓頂から
ほけタンポポの
種がとぶ
とぶ、
そして
日輪に映え、
甍に映え、
白壁に映え、
青麥の針に映え、
葱坊主の
圓頂に複歸。

櫻橋

聯合賣出しの旗旗が信號した、
段畑の桑の芽の風は
櫻町を下つて　さくらばし、
海からの燕が
本丁通を上つて櫻橋、
電線、電線のハンモック。
自動車、自動車の警笛、
川原の若芝から
五月の家鴨を追ひ出して
川上の藤の房をゆるがせ、
川堤の松の花から
五月の流れを寫して
川下の派出所、公會堂の横顔を
くづした。

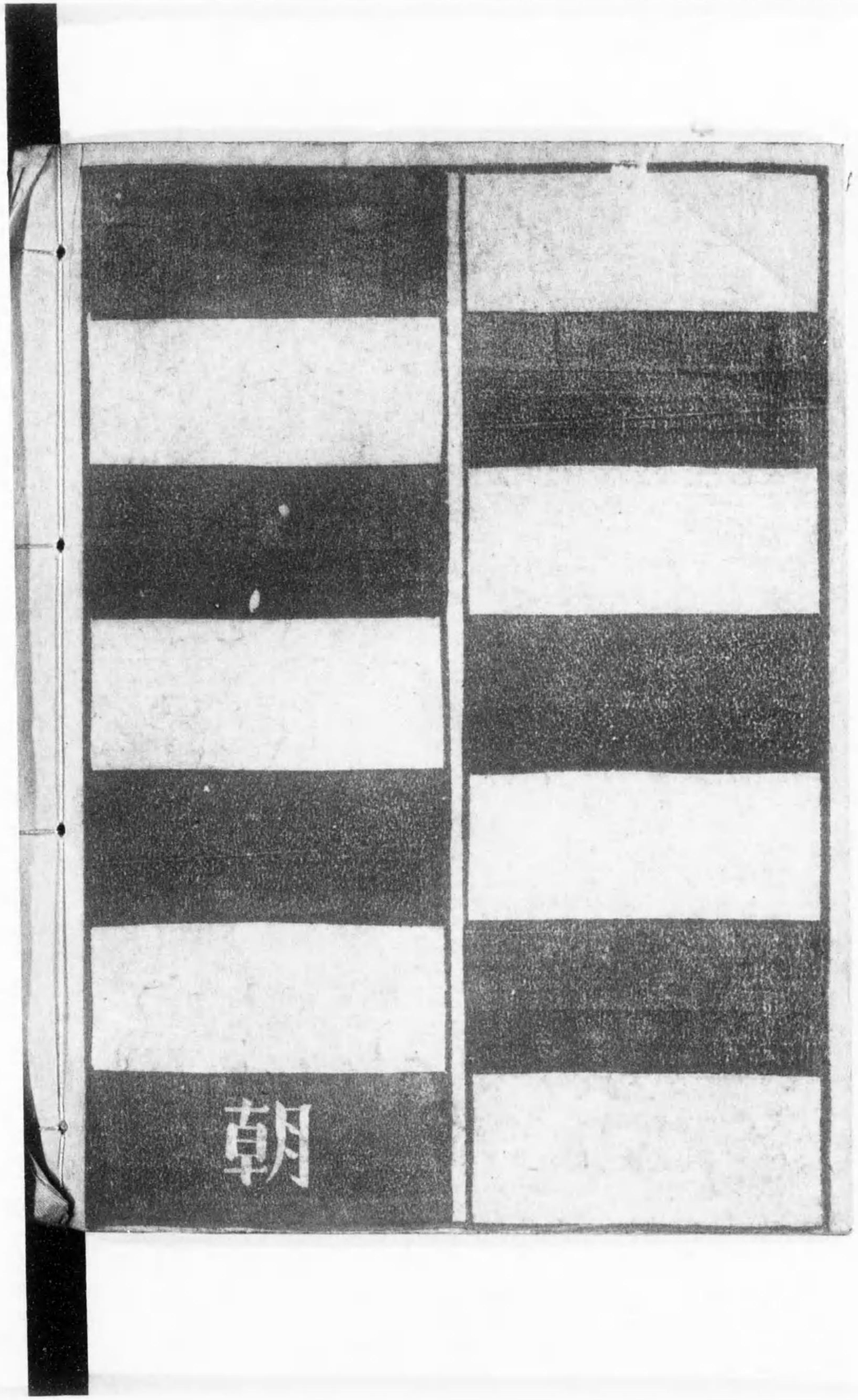
法華津峠

二千尺を
海面より眺めて立てば、
碧海の氣は、
合歡の花をゆすり
杉の根の青蔦をゆすり
岩の根の鬼百合をゆすり
てん屋前の
今年竹の穗をゆすつて、
そこに豊後水道をなびかせてる。
二千尺を
海拔より眺めて立てば、
翠巒の氣は、
松籟となり
夏鶯となり
蟬時雨となり
清水の石桶の蜂となり
かなかなと碎けて、
そこに蜜柑山の點々と散る。

註●てん屋(方言)—旅人のための茶店

新棧橋

遠見山に來た日は
　蛤山の彼方へ歸る、
夕凪の譜は
　待合所上のカフエーの
　天井に水陽炎、
　自動ピアノのキイを打つ、
大、宇の旗は
　ひそやかな海鳥のハンカチーフ、
ぽんぽん船の煙の吐息は
　浮輪を空へ昇らせる、
上り下りの鐵船よ
　水標の目盛に過ぎない、
ふるいとよ
　強かれ。

註（大、宇—大阪商船會社、宇和島運輸會社
（ふるいと（方言）—氣笛

終